人の血は水ならず

ステリマフ

原　卓也訳

文藝春秋新社

ステリマフ

人の血は水ならず

M. Stelimakh

Krovi lyudskaya —— ne Voditsa

昭和36年12月1日発行

訳　者　原　卓　也

発行者　小　野　詮　造

発行所　文藝春秋新社
東京都中央区銀座西八ノ四

本文印刷・理想社印刷
カバー印刷・大日本印刷
製　　本・矢嶋製本

定価　390円

万一乱丁・落丁の際は本社又は書店でお取換します.　Printed in Japan

人の血は水ならず

裝幀　栢森　輳

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

一

よく肥えた地主の牝牛をもらってからというもの、ステパン・クシニールは貧農委員会の集まりに、いつも、ボロ布にくるんだバタの小さな塊りを持ってくるようになった。かつては水晶のようにきらめく豪華なシャンデリヤが真上にかがやいていた。ずっしりと重い、足の反りかえった、貴族屋敷のテーブルのわきに立って、彼はそのバタを胴太の焼物の小鉢の中に、鎌の刃のかけらで一心不乱に削りおとす。オモチャの人形の頭とも、木の根の丸っこい瘤ともつかぬ恰好の小鉢だ。

百姓たちは、そこかしこの腰掛に座を占めて、神恐れぬ風情で手巻きタバコをくゆらせながら、口々にからかう。

「奴さん、あの小鉢のバタがなかったら、きっと死んじまうぜ！」

「ステパンだって自分の節制すべきものは、知ってるはずさ。奴さん、早く天国にたどりつきたいんだと！」

「へえ、それじゃ色事師の旦那も放免してもらえるだろうて！」

「おい、ステパン、お前せめて唇にバタでも塗っとけや！」

「いや、必要ないね！　そんなことしなくたって、あの連中は女の子にモテるんだから」

樫の実のように身体のしまった、逞しいステパンは、明るい小さな眼をきらりと光らせて、目の粗い真黒けな灯芯を指でつまみあげ、その手をあま色の髪で拭うと、真顔になって、きまじめな様子でドアの外に出て行く——反革命分子などが、貧農問題の論議を盗みぎきしに近づかぬよう、監視するためにだ。

彼の鋭い眼は、秋の夜ふけにさえ、もとの地主屋敷の近辺をうろつく怪しい人影を捉えるのだった。ステパンは疾風のようにその人影に襲いかかる。窓の下の鳩の鳴き声が、郡のお偉方やミロシニチェンコの声を、中途でさえぎることも、一度ならずあった。

「失せやがれ、とっとと消えてなくなるんだ！」

この言葉をきくと、集会はどっと笑い声でこたえるのだった。

「ステパンの奴、また富農をアジってるぜ！」

しかし、不安げな鳩の鳴き声は、闇の中でつづいていた。
「さあ、毒蛇め、窓のわきから離れるんだ、さもないとわが家の敷居もまたげなくなるぞ！」
集会は鳴りを静め、だれもが愉快そうに出口をふりかえった。そのあたりで、もっとずっと手取り早いアジを拝めるのだ。ただし、今度はもう両腕をふるってのアジである——実際の話、前線兵ステパンが、半ば崩れたこの地主屋敷を明るくしたのは、決して富農の子孫のためを思ってのことではないのだ！
しかし、今日の彼は集会に手ぶらでやってきた。そして、絶望にとざされた、影を思わせる姿で、傾いたベランダの、上部に蔓草のまきついた冷たい円柱のわきにたたずんだ。まるで秋口のカエデの葉のような、赤い、寸づまりの手が、ふるえながら、非情な大理石を軽く叩いたり、あるいはまた、膝のすりきれた、よそ行きのズボンの上に、力まかせに振りおろされたりするのだった。彼にとって世界はかがやきを失い、うずくような悲しい痛みに胸がしめつけられた。
貧農たちは無言のままステパンのわきを通りすぎた——彼の悲しみがみなの顔をも曇らせていた。おととい、三番鶏の鳴いたあと、暴徒たちがステパンの無二の親友ワシーリ・ピドプリゴラを、機関銃で射ち仆したのだ。彼らは母親までも殺そうとしかけたのだが、中の一人が、こんな女はただでさえ棺桶に片足をつっこんでるんだから、息子の遺骸の上で泣きわめかせて、委員会の奴ら全員にきかせてやる方が得策だぜ、と言ったのである。彼らは細君の留守だったことを残念がったあと、ワシーリの胸の上に新しい土地割当表を放り投げ、まだ温かい心臓に磨きあげた五寸釘を打ちこんで行った。
だから、碧い眼をした一徹者のワシーリは、その割当表をつけたまま、ひつぎに納められた。最後の審判の際にも、この人間が何のために一命をおとしたのか、神や人々にわかってもらうためにである。
ただ釘だけは、ぶちぬかれた心臓から抜きとり、半ば死んだような母親の手に握らせてやった。息子のいたことを思い出してもらうのだ。だが、この最後の釘を、母の心は堪え忍べず、母の指は持ちこたえられなかった。この指はかつて、幼いワシーリを胸に抱きしめて、いつくしんだものだ。だれかがわが子を辱しめた時には、やさしく頭を撫でさすってやり、わが子が日傭いの畑仕事に出かけて行く時には、ふるえながら、その肩にそっとおかれたものだ。そして、息子が戦場から無事に戻ることを神に祈りながら、

マメのできたこの指が聖像の前に十字を切るために組み合わされたものだった。それが今や、血のこびりついた一本の釘のために足がふるえて、母はひざまずき、見開かれたその瞳に狂乱の色が凍りついていた。ちょうど蜂房の中の花粉のように、日一日と心の中につもりかさなってきた、彼女の辛い生活全体が、不意に今、一握の砂よろしく、こぼれ散ってしまったのだ。さながら、そんなものなど存在しなかったかのようだった。

老女ボグダニーハはわが子の遺体の上に泣きくずれもしなければ、涙をふり注ぎもせず、悲しみに打ちひしがれている人々の中で、不意に、小さな低い声で復活祭の歌をうたいはじめた。まだ娘だった頃、人のたてこむ教会の外庭でうたった、遠い昔の歌だった。

わたしの植えたワシリョーク（ヤグルマ菊）
ヘイ、ヘイ、ワシリョーク、
それから、水をかけてやり、
ヘイ、ヘイ、かけてやり、
それから花をつみとって、
ヘイ、ヘイ、つみとって、
ワシーリ、ワシーリ、ワシリョーク、
ヘイ、ヘイ、ワシリョーク、
いと美しきわが花よ、
ヘイ、ヘイ……

こうして、もはや母の胸にはとどかぬ葬礼の鐘の音と、復活祭の《ヘイ、ヘイ》という歌声とが、一つ小屋の中で交錯した。前屈みになった人々の肩の上で揺られながら、スズカケのひつぎが運ばれて行った墓地へ、ボグダニーハが行かせてもらえなかったのは、このためである。

道ばたの柳は片側に身をかがめ、緑の手をワシーリにさしのべて、名残り惜しげに、秋のざわめきや、ほろ苦い涙を彼の顔に振りそそいだ。ワシーリの未亡人オリガは、泣き叫び、かきくどきながら、ひつぎを送って行ったが、一方、がらんとした家の中では老母が相も変らずワシリョーク（ヤグルマ菊）を育て、もはや彼女の家をも心をもいろどることのないその花で悲しみをまぎらせていた。

「ねえ、あれは好い兆候じゃないわね！」村中にこんな噂が流れた。

「何を植えようと勝手だけどさ、ただ自分の土地に植えてもらいたいね」いつも怒ったような眼をしている、胸のとがったナースチャ・デニセンコが、生垣ごしにワシーリの母の歌声にきき入りながら言った。

「地主さんの土地を分け合ってもらおうじゃないの、さも

ないと、こっちのにまで手をのばしてくるからね」
「もう手をのばして、窓の下をうろちょろしてるよ……父と子と聖霊のために祈りまつらん！」ダニコの老婆が鐘の音の方にうやうやしく十字を切った。「ほら、お葬いされてるよ、可哀そうに……」
「ところで、あんた聞いたかい、ワシーリのところにあった貧農委員会の割当表には、何かの記号がついてたんだって？」
「血だよ、記号じゃないさ！」
「そんなことわかるもんかね、血かも知れないよ。なにしろ、こっちは見てないんだから！　それはそうと、皇帝（ツァーリ）がもうイギリスで優に百万からの兵隊を集めたんだとさ。たしかにこの耳できいた話だし、夢にも見たわ」
「だって皇帝（ツァーリ）はボリシェヴィキに殺されちまったんじゃないのかい？」老婆のおちくぼんだ口の周辺で、細かい小皺の網がふるえはじめた。
「あんな連中に殺せるもんかね！　皇帝（ツァーリ）を狙って射ったものの、天使が弾をそらせてくださったのさ。ポチャーエフの聖母さまがコサックをお守りくださるようなもんだよ」
「ワシーリはだれにも守ってもらえなかったってわけさ。神さま、あの男の魂をお救いください、よし罪深くあろうとも……」
　参会者は戦争と家畜に荒らされた墓地から悲しげに散って行った。ステパンとオリガだけが、真新しい墓のわきに残った。オリガはしなやかな身体を打ちふるわせながら、暗い色のひつぎの枕辺で、身も世もあらぬ風情に泣いていた。今やこのひつぎにとっては、ワシーリの捲毛をまだ十分に楽しむ間もなかった彼女の若々しい腕よりも、素気ない墓標の十字架の方が、ずっと身近なものになったのだ。未亡人の蒼い眼の上で、弓なりの眉が、さながらどこかに飛び去ろうとするかのように、ふるえていた。あるいは大地に突伏し、あるいは空をふり仰いで、墓地の砂埃を払いおとしながら、眉はふたたび歪められるのだった。
　ステパンはオリガを慰めもしなければ、みずからも泣かなかった。ただ、身体全体の力が不意にぬけてしまったかのようだった。ワシーリとともにすごした日々や歳月が、執拗なはげしい痛みとなって眼前を走った――牧童だった頃に二人して、柳の柔毛のように黄色いガチョウのひなをトビから守ったこともあったし、兵隊当時に塹壕の中でうすみどり色のドイツ軍の毒ガスに息を喘がせたこともあった。
　そして、昨日まで、他国のこの毒素がワシーリの胸の中

で、静まることなく、ぜえぜえと鈍い音を立てつづけていたのだ。しかし、彼の胸から魂を奪いとったのは、その毒素ではなく、オーストリイで鋳造された、先の丸い、暴徒の凶弾だった。今や彼の魂は、新しい安らぎの場所を、新しい大地を求めて、まっしろな秋の雲の間を、それこそ太陽をめざして飛んで行くのだ。

痛みをこらえながらステパンは、大空にうかぶ、水泡のように軽やかな、雪白の雲の綾模様を、泣きはらした眼で見つめた。だが、彼の眼差しをいっそうひきつけるのは、くろぐろとした墓土だった。墓はもう、鳩羽色の埃にうっすらとおおわれていた。おおわれていないのは、涙の痕のくろずんでいる個所だけだった。

「ああ、ワシーリ、ワシーリ、お前のいなくなったあと、いったいどうすればいいんだ……」友はもういないのだと半信半疑の気持で思いながら、ステパンは時おりこう繰りかえすばかりだった。

最初の金メッキを施した九月の木の葉を、たそがれが霧のとばりで包んだ頃、ステパンとオリガは村にかえってきた。女は周囲の何一つ眼に入らず、足ももつれがちだったが、ステパンの方は、ほとんどどの富農の門口にも、だれかの顔が揺れていたり、じっとのぞいていたりするのに、脳髄がきりきりと痛む思いだった。他人の眼の無慈悲な好奇心がステパンを苦しめ、愚弄し、口には出さぬ彼らのさまざまな考えをわからせてくれた。

『どうだ、墓地に俺たちの土が盛りあげられたのを拝んできたか？』

『気をつけやがれ、さもないと貴様自身も十字架の奥に送りこまれるからな！』

しかし、ステパンがだれかの視線を捉えるや否や、敵意にみちた火花は消え失せ、人々の眼は無関心か、さもなければわざとらしい同情の色をうかべるのだった。ただ一人、《おべっか使い》という綽名で通っている、眉の長いヤコフ・ダニコだけは、持ち前の地主根性をあらためようとしなかった――家畜の仲買をしているうちに、人間まで家畜と同一視するようになったためかも知れないし、あるいはまた、ステパンが少年時代にずっと彼の父のもとで日傭い仕事をしていたためかも知れない。ステパンとオリガの姿を見ると、頬骨の張ったヤコフの赤ら顔がにやりと笑み崩れた。

「おや、もうお揃いで？　ひょっとすると、お葬いから、まっすぐ婚礼って仕組みじゃねえか？　ソビエト政権ては、何をしようと天下御免だからな！」

ステパンはわれを忘れて門のところに走りより、模様のような青筋のういている、生気にみちた富農の赤ら顔を、堅い掌で力まかせに殴りつけた。記憶に残ったのは、ヤコフの右頬全体が見るみる腫れあがり、剛い毛におおわれたこめかみの辺まで火のような色に染ったことだけだった。さらに今度は左頬に、洗い立てのようにあざやかな真赤な斑点が、いっそうはっきりとにじみでた。

「これが葬式の分だ、こっちは婚礼の分だ！」こう言うなりステパンは、もう一度平手打ちをくらわせて、ダニコの頬の赤みを均等にしてやった。

富農はかっとなって拳で空を截った。

「仲間の仇討ちをしようってのか？　今すぐ、はらわたを引っこぬいてくれるわ！」

「どっちが引っこぬくか、やってみようじゃねえか！」

「やるとも！」

「おべっか使いめ！」

「乞食の集まりめ！」

二人は門ごしにむんずとつかみ合い、怒りにかられて取組み合ったまま、骨や門板が軋むほどの勢いで、互いに相手を持ちあげにかかった。どちらのハンチングも一瞬のうちに地べたにけしとび、乱れた髪が宙にちらついていたが、やがてダニコは、しかるべきチャンスを捉え、自分の重みでステパンをねじふせようとばかり、通りにとびだしてきた。しかし、ねじふせるわけには行かず、二人は口汚なくののしり合いながら、砂埃の渦をまきあげて通りを転がった。緑色がかった灰色のダニコの眼は血走り、もはや一面真赤に染った頬はびっしょりと汗におおわれていたが、ステパンの顔は蒼白と化し、ケシの実のように細かな汗が、ふるえる鼻孔の、くろずんだ縁ににじみだしていた。

髪をふり乱し、服も破れた二人の百姓を、逞しいスヴィリド・ミロシニチェンコが、やっとのことで引き分けた。一応の仁義を立てるために彼はステパンを突きとばし、襟首のあたりを一発殴りつけてから、ダニコの首をすごい力でしめつけたので、とたんに頭がガチョウの首のようにすくんで、肩にめりこんだほどだった。

「ちっとばかり手荒な真似をしたけどな、勘弁してくれよ」ミロシニチェンコは、ささくれだらけの硬い指で、水兵特有のがっしりした胸のボタンを探りながら、彼を横眼で見やった。その胸部には、青い捲毛の美女の頭が、襟のかげからのぞいていた。

「お前らはみんな、一つ穴のムジナだからな！」ダニコは血と憎悪のまじった唾を吐きすてると、顔をしかめながら、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

服の肩当てに片手をのせた。
「助けてもらっといて、まだ怒ってやがるぜ」ミロシニチェンコはあきれてみせ、今度は、又もやダニコの方にそっと忍び寄ろうとしていたステパンに視線をとめた。「おい、ヤコフ、あんな事件のあとだから、せいぜい気をつけろよ！」
「手前こそ気をつけるがいいや、くたばりぞこないめ！」殴られて耳の下の腫れあがった富農の顔が、憎しみに生気をとり戻した。
「ちぇ！　何をほざいてやがるんだ？」
　ミロシニチェンコは立ちどまった。色あせたシャツの手製のボタンから、ひろがったボタン穴がまたしても外れ、巡洋艦《ジェムチューク》の元水兵を死ぬまで見すてぬよう運命づけられた軽薄な美女が、彼の胸で、青い口をあけて不意に笑いだした。
「何を、だと？　何をだか、わからねえのかい?!」怒りと憎悪に息を切らせながら、ダニコがかすれ声で叫んだ。「穀物だの、土地の分配だのを割り当ててるじゃねえか？一匹の牛から皮を二枚取ろうってわけか？」
「ああ、割り当ててるよ！」ミロシニチェンコは灰のようなあま色の髪を、注意深い様子で耳のうしろに掻きあげる。今度は額の皺という皺が、強情そうにダニコの方に向けられる。
「土地を細切(こまぎ)れにするなんて、おどしてるじゃねえかよ？」
　ダニコは灰緑色の眼で、食い入るようにミロシニチェンコの眼を見つめる。ひょっとしたら、ワシーリの死後、この水兵の心もふるえているのではないだろうか？　そうだとしたら、ヤコフとて惜しげもなくミロシニチェンコの家へ、牝牛の一頭も曳いて行ってやるのだが。この男の子供たちが、一匙の牛乳も入らぬ精進粥をがつがつ食ったりせぬようにだ。
　ミロシニチェンコは、さながら視線で相手を縫いつけるかのように、富農を見やった。
「おどしてるわけじゃないぜ、ヤコフ、本当に細切れにするつもりさ」
「つもりだと？」相手は咽喉を鳴らし、まるで水兵の美女が引越しでもしてきたかのように、片手を胸にのばした。「そのつもりさ！　お前の得にもなるんだ。ひょっとしたら、毒蛇じゃなく、真人間になれるんだからな！」こう言うとミロシニチェンコは、幅広い肩の上に誇らしげにのっている丸い頭をくるりとまわした。

「それじゃ、やっぱり細切れにしようってのか、スヴィリド？」ダニコの声音には悲しみと、哀願と、ひとしずくの希望とが脈搏っていた。

「必ず細切れにするよ」スヴィリドは腹も立てずに約束した。

「そういう手前自身、夜昼かけて、休みなしに切り刻まれるがいいや！　そのうち、ペトリューラ（ウクライナの国内戦当時、自由ウクライナを唱えた反革命の闘将）がお前の首をもらいに来るぜ！」

「反革命め、坊主のとこへ一走りして、お前のペトリューラの葬いでも頼んどくんだな！」青海原の水滴をまばらに宿した、ミロシニチェンコの灰色の眼が、けわしくなった。彼はダニコの方にずいと一歩踏みだした。相手は高い柵を背中と尻でこすりながら、門の方にとびすさった。「そうとも、それがいいぜ！　つんぼなら、黙ってるこった。その方が罪は軽いからな！　さ、行こうぜ、ステパン！」こう言うなり彼は、底釘を打った大きなドイツ製の長靴の痕を、埃の道にくっきり残しながら、通りを歩きはじめた。

ステパンは、ちり毛を立てたスズメよろしく、なおもダニコの屋敷を横眼で睨みながら、しぶしぶミロシニチェンコのあとに従った。

「おい、どっちが強いんだ？」スズメのようなステパンの意気ごみを見て吹きださぬよう、ミロシニチェンコはふり返りもせずにたずねた。

「どっちもさ、いい勝負だな」ステパンが気のない返事をした。「でぶのくせに、筋張った野郎だ！」

「強い奴を叩きのめすには、頭をよく働かせなけりゃだめだよ」ミロシニチェンコはステパンの脇腹を手の甲で軽くつついた。

二人はワシーリ・ピドプリゴラの家のわきを無言で通りすぎながら、死に絶えたような家の気配にじっと耳をすます。ステパンは心が騒ぎだす。またしても《わたしの植えたワシリョーク……》が、きこえるような気がするのだ。

しかし、ワシーリの家は声もない。もっとも、山と積みあげられた薪のわきに、ボグダニーハ老婆の、うなだれた、孤独な姿が見えはした。やせこけた手の指は、さながら赤児をあやそうとするかのように、胸に組まれたままだった。

二

ミロシニチェンコはランプの心細い火を頭上にかかげ、参会者たちをひとわたり注意深く見まわして、思わずぎくりとする。森番のミロン・ピドプリゴラが、いとこのワシーリに実によく似ているのだ！　ミロンは弟のオレクサンドルと肩をならべて坐っているが、恐怖の影と思案が幅広い額に深い皺をきざみつけている。時おり、彼は寒そうに肩をすくめる。ただ、残念なことに、ミロンは、ワシーリとは精神がまるで違うのだ。

「オレクサンドル、どうして途中からかえったりしたんだね？」ミロシニチェンコは疑わしげにたずねる。

ずんぐりしたオレクサンドル・ピドプリゴラが、腰掛から立ちあがる。じっと床に眼をおとしたまま、彼は無愛想な言葉一つ胸の奥からとりだすことができず、旧式なベルダン銃の摩滅した銃口を、うしろめたそうに手から手へ放り移しているだけだ。

「おい、きこえないのかい？」

「実はね、スヴィリド・ヤーコヴレヴィチ」眼をあげずに彼は言う。「どうにも我慢できなかったんだよ」

「火事にでもなったかい？」

「火事ってわけじゃないけど、我慢できなかったんだ」彼はまるで指でもやけどしそうに、いっそうせかせかと銃を持ちかえる。

「だから、なぜなんだい？」

オレクサンドルはハンチングをぬいで、ベルダン銃の先にかぶせ、どぎまぎした視線をミロシニチェンコに注ぐ。

「俺の土地がどこになるか、もう一遍きいときたくてね。どうだろう、割当表はどんな風に変ったかなって、のべつ考えちまうんだ」

広間に笑い声があがり、ミロンが弟の服の裾をひっぱった。懺悔に来たわけでもあるまいに、何だって正直に打ち明けたりするんだ？

「もし暴徒が襲ってきたらどうする？」ミロシニチェンコは微笑したが、すぐに眉をひそめた。

「いや、そんなことはねえよ、スヴィリド・ヤーコヴレヴィチ、俺の持場になんぞ来られるもんかい！　一時間くらい前に赤軍のコサックたちが到着したもの。俺がこの手で梁の下から燕麦を六束、投げてやったよ」

「コサックは大勢かい？」

「五十人ばかりね。まだ来るに違いないよ。勇敢そうな連中でね。馬も立派だし。暴徒退治の準備をしてるみたいだったぜ」

「そいつは素敵だ！」

集会は活気づいた。
「きっと、わが家で枕を高くして寝られるような時代が来るぜ」
この言葉をきいて、ミロシニチェンコは、まるで自分のことを言われたみたいに顔を赤くする。なにしろ、ほとんど毎夜、穀倉か、でなければ畑の禾束の中や、乾草の山の上で、寒さに身をちぢめている始末なのだ。この頃ではどこへ行っても、ワラの匂いがするような気がする。彼はオレクサンドルを見つめ、隠れ家を与えてくれるそれらの禾束や乾草の山の感触を背中で味わう。
「お前の土地はね、オレクサンドル、例の境界のところだよ。さ、それじゃ任務につくんだ！　僕にも自衛は必要なんだからね！」
「スヴィリド・ヤーコヴレヴィチ、そうときまったら、せめて選挙に立ち会わせてくれないかな」オレクサンドルは学校の生徒のように不動の姿勢をとった。
ミロシニチェンコはかっとなりかけたが、思い直した。
「許可するよ、お前にあっちゃかなわんな！　もしかしたら、自衛軍の中で、ほかにもだれか舞い戻ってきてるんじゃないか？」
「だれもいないさ」オレクサンドルは明るくなった。ハンチングも快活になり、ベルダン銃の銃口の上でくるくるとまわった。「俺が自分でちゃんと確かめてきたんだから！　カルペーツの奴がズラかろうとしたんで、橋のたもとで、銃の台尻で殴らんばかりにして部署に追い返してやったんだ。秩序をわきまえさせるためにね。そういうわけだ！」
「へ！　どうだい、大そう勇敢じゃねえか！」短い口ひげのイワン・ボンダリが彼をふりかえった。鞣したような幅広いその顔が愉快そうな微笑にかがやいた。
「見ての通りさね、イワン・チモーフィエヴィチ」オレクサンドルは下手に出てこう言うと、身じろぎ一つせぬミロンのとなりで坐り心地を直した。
今やミロシニチェンコは、貴族のテーブルの上に灯明皿をおき、眼に覆いかぶさった髪を直すと、刺青の美女の捲毛を掌で包みかくすようにして片手を胸におく。眼の前の薄暗がりの中に、大地の子たちの、風雨にくしけずられた、ざんばら髪の頭が、凍りついたように凝然としていた。
彼らの荒れた手は、一生の間、こがね色の穀粒を育ててきたのだ。子供の頃から主人の鞭が肩におどり、他家の牛綱（耕作の際、牛の角にかける綱）が血のにじむほど掌をこすり、そのあと、硬い血マメにおおわれた、かさかさの手が

フロシーはなみだをぽろぽろこぼしながら、居間からとび出していきました。そのときちょうど、ティミーのおとうさんが目の前を通りかかったので、ふたりは正面衝突してしまいました。ティミーのおとうさんは、たったいまもどってきたところだったのですが、フロシーがどうして泣いているのか、すぐにさっしがつきました。

「なんともないよ」ティミーのおとうさんはそういって、フロシーをだきあげると、思いきり高くあげました。いままで泣いていたフロシーが、こんどはわらっています。

すっかりきげんをなおしたフロシーを下におろすと、ハムリンさんはいいました。

「うーん、この前会ったときより、ずいぶん大きくなったなあ。このぶんだと、すぐにこんなことしてあげられなくなるぞ」

そこへ、ティミーとフレディーが、けろっとしてかけよってきました。バートとナン、それに、ハムリンさんのおくさんもあつまってきました。

「きみたちみんなが、びっくりするようなことがあるぞ」ハムリンさんは、大げさな

金や穀物で買収しようとしたりしている。しかし、こんなのはざらにあることだ！　ただ、残念なのは、土地に対する証書のないことである。それさえあれば法律が、貧農にとっても富農にとっても、もっと強固に鳴りひびいたに違いないのだ。彼はこの問題を郡委員会に持ちだそうとしかけたことさえあった。が、そこでは、ただ、あきらめたように手をふってみせるだけだった。

「変ってるね、君も！　君のその証書とやらに使う用紙を、いったいどこで手に入れりゃいいんだい！　そうだろ、新聞は包み紙に印刷し、命令だって古文書の裏に刷ってる始末なんだぜ。時にはね、表にわれわれの命令が書いてあるのに、裏には皇帝のワシがそれに向って杖をふりまわしてる、といったような、いまいましいことさえあるんだよ。一枚の紙に二つの政権が同居してるんだからな……」

スヴィリド・ミロシニチェンコは、自己のとっておきの言葉を口にする前に、さまざまなことを思いだした。人間だれしも、いつかは自己のとっておきの言葉を口にするものだ。人によっては、その言葉が幼い頃の《ママ》で途切れてしまい、その後、人間が生活に切りさいなまれ、揉みしだかれて、けがらわしいこと以外何一つ口の中に残っていないような者もいるだろう。また、愛する女性のために思いがけなくその言葉が見いだされ、長靴を友人のところにあずけたまま、ただちに婚礼にのぞんだ者もいる。さらにまた、子供らが一生涯心にきざみつけておくようにと、墓への入り際にそれを口にした者もある。

ミロシニチェンコは自己のとっておきの言葉を、生みの母にまわらぬ舌で語る機会にめぐまれなかった。彼の誕生の日が母の命日になったからだ。かたくなな不撓不屈の心を乙女の前に打ちあける、めぐり合わせにもなっていなかった。たまたま、愛情ではなく同情心から、若い未亡人と結婚し、二児をもうけはしたが、結局は、悲しみにとざされ、しかし涙一つこぼさずに彼女を墓地へ運んだのだった……

ミロシニチェンコは、革命に関するおびただしい数の本を読んだ。しかし彼の言葉は、書物くさくない素朴なものだった。こわされずに残った石膏の美女たちが四方の壁から、うさんくさそうに見つめている、この地主屋敷の、床や敷居や、出窓やベンチに陣どった、これら大地の殉教者や勤労者のための、とっておきの言葉だった。

「諸君、きょう郡執行委員会が俺たちの土地分割を確認してくれた。今こそ俺たちは、あらゆる新しい法律にのった、正真正銘の土地の主人なんだ。きこえるかね、みん

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.